

OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学报 第234号 2012年11月10日

OCHADAI GAZETTE Autumn, 2012



写真: 杉井 昭子(理学部生物学科2年)

知識、見識、寛容さを育む大学

CONTENTS

TOPICS

- | | |
|--------------------------------------|---|
| お茶の水女子大学の教育と研究の特色…………… 1-2 | 附属学校園からのお知らせ…………… 7-8 |
| ● 学長 羽入 佐和子 | |
| 卒業生からのメッセージ…………… 3 | キャンパス点描…………… 9-10 |
| ● 名誉学友からの寄稿
志村 道子 さん (文教育学部国文学科卒) | ● オープンキャンパス2012を開催しました |
| ● 工藤 まゆみ さん
(大学院人間文化創成科学研究科理学専攻) | ● 岩手県教育委員会との相互協力に関する協定を締結 |
| 学生のアクティビティ…………… 4 | ● 本学卒業生黒田玲子さんが2013年度
「ロレアル・ユネスコ女性科学賞」を受賞! |
| ● 郡 宏 先生
(大学院人間文化創成科学研究科自然・応用科学系) | ● 国際シンポジウム「日米のワーク・ライフ・バランス
～ジェンダー・格差センシティブな視点から～」
を開催しました |
| 教員紹介…………… 5 | |
| ● 坂本 香織 さん
(文教育学部外国文学科卒) | |
| 卒業生紹介…………… 6 | |



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

お茶の水女子大学の教育と研究の特色

新たな学士課程教育

お茶の水女子大学では、新たな学士課程教育を開始しました。「21世紀型文理融合リベラルアーツ」と「複数プログラム選択履修制度」です。その特色は、学生が主体的に学び、思考の柔軟性を訓練することにあります。

「21世紀型文理融合リベラルアーツ」の科目を初めて履修した学生からは次のような感想が寄せられました。

「今までとは違った視点から学ぶことができよかった」
 「理系でも文系科目の講座に参加できて、すごく面白かった」

「文系・理系の科目をあまり気構えずに受講できて本当によかった」

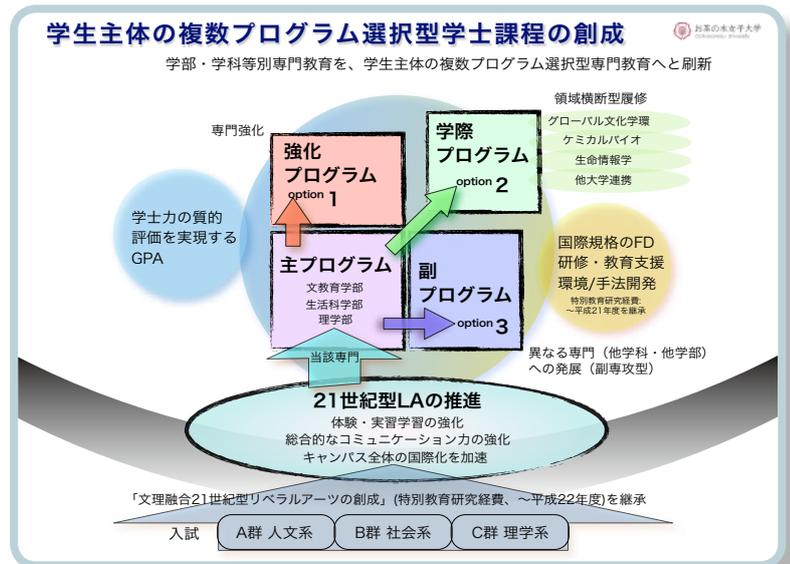
私たちの前に立ち現れる問題には当然のことながら文系理系という区別はなく多様で複雑です。例えば、エネルギー問題や、iPS細胞研究の臨床応用が提起される時に生じる問題を考える際にも、検討すべき課題は学問の領域を超えますが、そのときには確かな専門的知識と同時に、専門を超える柔軟な思考方法が必要になります。

「21世紀型文理融合リベラルアーツ」教育は、その柔軟な思考を身に付けることを意図したプログラムです。現在、「生命と環境」「ことばと世界」「色・音・香」「生活世界の安全保障」「ジェンダー」という5つのテーマを設定していますが、これらのテーマについて、文系理系の教員がそれぞれの専門的立場から議論することで、同じ問題に対する複数のアプローチの仕方を学ぶことになります。

「21世紀型文理融合リベラルアーツ」教育を開始したのは2008年ですが、昨年2011年からはさらに学部専門教育として「複数プログラム選択履修制度」を開始しました。この制度では、学生が主体的に専門的知識を深めるために複数のプログラムを設定しています。

この制度では、選択した専攻（主プログラム）を発展させる方法として、主プログラムの専門をより深く追求する履修方法（強化プログラム）、主プログラムの関連領域へと学びを広げる履修方法（副プログラム）、主プログラムを核に複合的な領域を学ぶ履修方法（学際プログラム）があります。

学生が自らの問題意識に応じて主体的に専門性を高めるこのシステムは学生の自律性と、優秀な教員の丁寧な教育体制によって初めて有効となる教育体制であると考えています。



複数プログラム選択履修制度と21世紀型文理融合リベラルアーツ教育

教育と研究の協働体制

このような本学の教育の特色である学生の主体性の尊重と柔軟な思考の練磨は、大学院博士課程教育の特色でもあります。

今から36年前に本学に博士後期課程の大学院が新設されましたが、この大学院には社会人経験者が多く在籍し、学際的研究を特色としていました。現在でも、3つの学部が大学院では1研究科となっていることにも明らかのように、本学では、大学院においても異なる領域の学術的交流が活発です。

学問は社会から提示される問題に対して敏感でなくてはなりません。そのためには既存の専門領域を超える力が必要です。この教育方法を支えているのが教育を担う教員の研究力の高さにあります。優秀な研究者が教育に携わり、研究と教育が一体化していることも本学の教育の特色です。

お茶の水女子大学の研究は、基礎研究を基盤とし、「人と社会と共に在る研究」、あるいは「生活者の視点」を特色としているといえますが、社会に対して専門的知識を如何に活かすことができるかという視点をもった研究姿勢は、学部と大学院に共通の研究体制とも深く関連しています。

一人の人間として社会の現状を認識し、専門的見地から未来を見据えて発言できる優れた研究者を育成することをお茶の水女子大学は目指しています。

国立の女子大学としてのリーダーシップ教育

さらに、最も歴史のある国立の女子大学として、お茶の水女子大学では女性リーダーの育成にも力を入れ、とくにグローバルに活躍できる力を蓄えたリーダー育成を行っています。

2010年に閣議決定された「第3次男女共同参画基本計画」に記されているように、現在女性の社会的活躍が期待され、特に、意思決定過程に参与する女性を育成することが望まれています。

本学のリーダーシップ教育では、「知性」「心遣い」「しなやかさ」をキーワードとしていますが、国立の教育研究機関として、高度な専門性を身に付けていること、他者の考えや立場を配慮できること、しなやかな強さをもって行動できることが、リーダーの資質として重要であると考えてのことです。

リーダーシップの授業には、お茶の水女子大学の歴史や教育、研究の理念を学ぶ「お茶の水女子大学論」がありますが、その他に企業との共同プログラムをはじめ、キャリア教育などいくつかのプログラムを開設しています。

さらに今年度、グローバルに活躍するための外国語教育や海外派遣プログラムも開設することになりました。



お茶の水女子大学論での講義

学生への期待—知識、見識、寛容さ—

優れた素養のある学生が、お茶の水女子大学で学び、力強く未来を創造することを願い、本学では教育課程の改革を進めてきました。その根底にある教育の理念は、知識と見識と寛容さです。本学の教育を通して高度な専門的知識を身につけ、適切に判断する見識を持ち、他者に対して寛容に対処し、自らを輝かせつつ社会を担うことを学生には期待しています。

2012年秋

お茶の水女子大学長
羽入 佐和子

卒業生からのメッセージ

名誉学友からの寄稿 「する」という動詞



窓際の机に向かう夕べは市立美術館の丘を照らす月を仰ぎ 朝は蒼穹に行く雲を眺め 行くという語の連想から ある日教室で、あなたにとって一番大切な動詞は何ですかと問いかけました。しばし沈黙の後 考えるという答えに多くの同意が集り、動植物と違って 人は考える考え学んでひととなり、文化文明を開花継承し考えを言葉で伝え意見を交わし、連携して社会を形成する と続きました。

そうではありますが、私のもう一つの答えは“する”という動詞です。行動する 実践する 思索と行為は一体となり、方向を定め 前進を支え、生活を改善する力になります。活動する 作る 働く 向上するとともに、たじろぎ諦め 躓き挫折し、人は正と負のはざまに立ち、意識せずして多くの動詞で暮らしています。考えたと思っても それは殆んど錯覚に近く、一般論の域を出ず、意見とも言えない公式論に流され流れていることにも気づきません。そのありふれた風景から授業は始まります。考えに停滞する淀みを拒み、自己満足の殻をわが手で壊して立ち上り歩み出せば、本当に考えたか否か自分の踏み跡を見て確かめることができるでしょう。

小論文講座の予習ノートにAさんはこう書きました。「かくありたい、こうするべきだと思う姿にほど遠い自分への嫌悪をもて余しています。説明力は大切ですが、単なる説明や描写でなく、作品と呼ぶに値する文章を書けるように今私は何を越えれば良いのでしょうか。」ノートに書いて返しました。こうするべきだと考えるところに 本当の自分はいないのです。したいのにできない、であるべきだと頭でわかっているながら そうしていない自分、そこにあなたも私もいるでしょう。それをどう“する”か。外

に在る規範を課題として身に引き受け、遠くを見る視線を内に注ぎ、傍観者から当事者となり見たくない自己の内面と向き合い、不如意を克服しようとは私は何ほどのことを実行したか自己に問い 踏み込めば、一般論を越え綺麗ごとに終らない内容の手応えを掴めるでしょうか。

そう書きながら、型を踏み枠に守られ 慣習に安住して、知識乏しく考えの浅い至らぬわが身を顧み、実行を迫られるのは私自身です。

たい は架空の願望に過ぎず、べき は観念に止どまり、今私は行動していないと言うに等しく、そこで行き詰まる会話や文章が道を鎖します。B君が、学校で教える知識はあまり役に立たない と安易に書くとき、彼はどんなに多くを知り、生活に不可欠な読み 書き 計算する基礎学力を身につけ、協調も忍耐をも学んで来たか、その半面を見落とし、自分で役立てようと意識しなかった姿勢を露呈します。知識欲に振るい立ち、反応する体質を獲得しようと今どうするか、問われるのは常にこの動詞の自己開発力、問題解決能力にほかなりません。

この秋 こんな便りが届きました。東北地方の山の無人小屋で満月の夜を迎え、文通を再開した私とさまざまに対話しながら ひとり朝日連峰に登るでしょうと。昭和29年に初めて教壇に立ち三年間をともしして 卒業後会う折りのなかったこの人が、経済に関する著書を送って来ました。遠くからひびく冴えた鐘の音を聴く思いを込めて読後感を書き送り、この人たちの寛容に赦され危うい足どりで辿った日々を回想しました。中秋の名月の夜 私もまた山に在る人を思うでしょう。今宵 下弦の月は 中天に輝いています。

(志村道子 昭和29年3月 文教育学部国文学科卒)

「ロレアル-ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」受賞

工藤 まゆみ さん インタビュー



安藤美姫さんから受賞者の方たちと（工藤さんは1列目右から4人目）

「ロレアル-ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」は、将来を担う優れた若手女性研究者を奨励・助成する目的で、化粧品メーカーの日本ロレアルにより日本ユネスコの協力のもと2005年に創設された。この賞は、ロレアルグループとユネスコ本部が1998年より世界規模で展開している「ロレアル-ユネスコ女性科学賞」の国内賞にあたる。物質科学、生物科学を研究する博士課程の院生を対象に各分野から2名、計4名を表彰し、受賞者には奨学金100万円が贈られる。7回目を迎える今年、本学大学院 人間文化創成科学研究科理学専攻化学・生物化学領域 棚谷研究室の工藤まゆみさんが物質科学分野で受賞の栄誉に輝いた。本学としては、昨年の竹原由佳さん（人間文化創成科学研究科博士後期課程理学専攻）に引き続き2年連続の受賞となる。

受賞と研究

「この賞を知ったのは学部3年の時でした。当時の授業で、とても良い賞だからお茶大生に応募してほしいと紹介されたのです」。その頃からずっと応募を考えていたと言う。「昨年1年間フランスへの留学を経てから、指導教員の棚谷先生のご協力のもと応募に至りました。」

今回の受賞に繋がった研究内容は、有機化学の一分野である超分子化学だ。「一方向巻き的人工らせん分子を構築するのがテーマです。一方向巻きらせん構造は、DNAやタンパク質といった生体内高分子にも含まれていますが、その種類や機能は限られています。それに対し、私は人工の分子を自由にアレンジすることによって、さまざまな構造や機能を加えたユニークな人工分子を構築することが、将来的には生体内分子に置き換わる機能性分子の開発にもつながると考えています。」このように、工藤さんは基礎研究者でありながら研究に応用性も見出している。賞を受賞するにあたって評価された点として、工藤さんは、「昨年1年間のフランスでの研究留学経験」、「化学を専門としない審査員にも伝わるわかりやすいプレゼンテーション」を挙げている。国際的な賞ということで受賞者全員が研究留学などで海外経験を積んでおり、受賞式の際には互いの海外経験の話で盛り上がったそう。

女性研究者として

「学部時代は学校の先生を目指していましたが、4年生になって研究室に配属されてからは、研究が楽しいと感じるようになり、また今回の受賞が後押しとなって、今は研究者を志望しています。」そんな工藤さんの理想像は、指導教員の棚谷先生だ。「今は子育てをされていて、ご家庭がありながらも研究と両立している姿は本当にロールモデル的存在です。」しかし、棚谷先生のような日本の女性科学者はまだまだ少ない。日本で女性科学者が増えていくために社会に求められることについて、「私の分野では、朝から深夜まで仕事をしている研究者が多く、女性には時間的にも体力的にも不利なことが

が多いのが現状です。女性研究者でも研究を続けやすい体制作りが必要だと思います。」と提案している。

また、もう一人工藤さんが尊敬するのは、本学名誉教授の藤原正彦先生である。「1年生の時に藤原先生の授業を受講していました。そのときに教わった『研究とは、選択の連続である』という考え方に感銘しました。山の頂上に咲く美しい一輪の花（研究目標）に向かって山を登る過程で、分かれ道（選択肢）があります。このとき、正しい道を選び、進んでいくことによって、必ず頂上へ到達できるという考え方です。」これが工藤さんの基本姿勢となっているようだ。「この考え方に基づいて研究を進めることによって、行き詰まった時にも冷静に対処できているのではないかと思います」と自己を振り返る。

お茶大の後輩たちへ

「私は、もともと理系科目が得意ではありませんでしたが、化学が好きであるからこそ、ここまで進んでこられました。ですから、まずは苦手なことも含めて幅広い分野に興味を持って接し、中でも特に好きだと思えることを見つけて一生懸命取り組むことが大切だと思います。」

文責：平成24年度広報インターンシップ生

小野なつみ（生活科学部人間・環境科学科3年）

菊池瑠梨子（文教育学部人文科学科地理学コース2年）

栗田始雪（生活科学部人間・環境科学科1年）



実験中の工藤さん

教員紹介

今回は、人間文化創成科学研究科自然・応用科学系准教授の郡宏先生をご紹介します。郡先生は、大学院では理学専攻情報科学コース、また学部では理学部情報科学科にご所属です。



Kori Hiroshi
郡 宏

好きなことを大切に そして大事に育ててほしい

何人かがパターン形成に興味を持っていたので、この機会に取り組んでいこうと思っています。

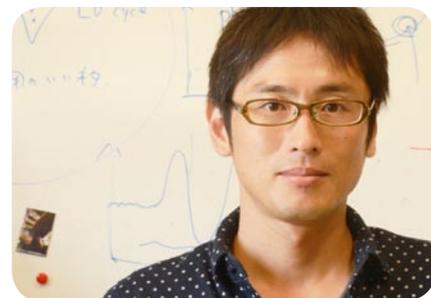
Q.お茶大の印象とお茶大生へ向けてのメッセージをお願いします

当初、女子大というのは、まったく想像がつかなかったのですが、着任して感じたことは、「学生にとって女子大は良い場所だな」ということでした。共学の場合、理系の女子は人数が少ないため孤立してしまうことがあったりしますが、お茶大では友達をたくさん見つけることができ、みなさんとても元気に活動されている感じがしています。

学生へのメッセージですが、まず留学を強く奨めます。留学できるチャンスは人生でそうはありません。留学は絶対に人生の宝になります。交換留学の制度などをいかして、是非行ってもらいたいです。

それともう一つ。自分はかなり楽天的な性格なのですが、それでも新しい町に移り住むたびに新たな交友関係を作らなければならず、そして人間関係に苦しみ、また、自分の能力の足りなさや将来への不安に悩まされました。そのたびに自分を助けてくれたのが、自分の好きなことでした。新しい町ではサッカーを通して直にいい友達ができました。ベルリンの冬は真っ暗で精神的にとってもつらいのですが、でも毎週末のクラシック音楽のコンサートが希望の灯火でした。いい小説を読めば元気も出ましたし、それを肴に友達と飲んで語り合い、そうやって好きなことにたくさん助けられてきました。みなさんにも好きなことがあると思います。それらを大切に、人生のよき伴侶として大事に育ててほしいです。

文責：小林一郎
(大学院人間文化創成科学研究科
自然・応用科学系教授)



やっている姿がとても印象的でした。自分の過ごしてきたところとの違いは、教員などの指導者の「励まし」だと思いました。それを見て、自分も学生をしっかり励ませるような教員になって、日本の大学をこれくらい元気にしたいなと思いました。

なと思いました。

Q.ご専門内容について、また、現在のご研究内容についてご紹介ください

私たちの身の回りで繰り広げられる複雑なダイナミクスを、数学的に記述し、予測、理解、制御する研究を行っています。研究対象として興味を持っているものは、「時間変化するもの」、「うつろい行くもの」などです。その中でも、とくに生命現象に興味を持っています。現在、進めている研究のほとんどが「生物リズム」に関するものです。取り組んでいる研究課題のひとつは、生物リズムがどうしてそんなに正確なのか、ということです。体内時計にしても心拍にしてもリズムがすごく正確です。そのような正確なものが生物のようなゆらぎが多い世界の内でもどうやって作られるのか、とても興味をもっています。それから、細胞分化に関する課題にも取り組んでいます。遺伝子発現には、実はリズムが大きく関わっていて、そのリズムを理解すると細胞分化を上手く制御できるのではないかとということが考えられます。この研究は、国の戦略的創造研究推進事業(CREST)の課題として進められる研究で、共同研究者として京都大学のグループと一緒に課題に取り組んでいます。また、自分の研究室の学生達とやろうとしているものとして、生き物の模様などのパターン形成に関する課題があります。この課題では、簡単なルールから複雑な模様ができるメカニズムを解明しようとしています。リズムが時間方向の秩序形成なのに対して、パターンは空間方向の秩序形成になり、数学的には両者はかなり近いものとなります。どちらも興味があります。とくに、自分は小さい頃から、うさぎの模様とか岩石とかの模様(結晶形成など)がどのようにできるのかについて興味を持っていました。ちょうど学生のうち

Q.ご出身、ご経歴などについて教えてください

千葉県出身です。落花生だけでなくトマトやキュウリもとてもおいしい所です。東北大学を卒業後、京都大学大学院に進学し博士号を取得しました。その後は、ドイツ(ベルリン)のマックスプランク研究所研究員、北海道大学理学研究科COE研究員を経て、2008年3月より本学、お茶大アカデミック・プロダクション特任助教になり、2012年4月より本学大学院人間文化創成科学研究科自然・応用科学系准教授に着任しました。また、趣味は、スポーツ、音楽鑑賞、文学鑑賞、散歩、お酒などです。

Q.先生は様々な分野や場所でご研究をされてきていると伺っています。どのようなことをご経験されたか教えてください

分野として経験したということよりも、様々な国や地域で過ごしたことで、いろんな経験をしてきたと思います。学部の時を過ごした東北大学は、みんな近くに住むことになる地方大学の特徴でしょうか、毎日友達たちと夜を明かす家族的なつきあいを楽しみました。大学院を過ごした京都大学は、学生同士で自主ゼミをたくさん行い、自分たちの力で研究を進める風土がありました。でも、教員たちはお茶大のように学生に気を配ってはくれず、成果を評価してくれる人もおらず、そうすると学生たちが元気を保つのは難しかったように思います。自分自身、そういった研究活動に希望が見えず、研究者ではない道に進もうかと考えたことが何度もありました。ですが、ドイツに行ったら、学生たちがみんなすごく元気に研究をしていました。ドイツは日本より大学の職が限られているなどアカデミックに対する状況は良く無いはずなのに、そんな中でもみんな前向きにしっかり

卒業生紹介

自分の可能性に「オープン」でありたい

社員数3千名のうち女性が約6割を占め、約25%がワーキングマザー。育児休業後も9割が職場に復帰してくる。女性管理職比率33%...ベネッセでは、女性が働く土壌が整っている。今回は、広報畑で活躍する坂本香織さんを、新宿オフィスにお訪ねした。

Sakamoto Kaori
坂本 香織



株式会社
ベネッセコーポレーション
広報部社外広報課課長

1994年お茶の水女子大学文学部教育学部卒業。同年、第一生命保険相互会社入社。1996年(株)ベネッセコーポレーション入社。中学講座事業部、財務・IR室、経営企画部を経て、2004年から広報部。千葉県出身。趣味は季節の草花鑑賞とワイン。

頑張れば素敵な女子大がある

オープンキャンパスが今のように盛んでなかった20数年前、高校一年生の坂本さんはお茶大のキャンパスを友人と見学しながら、「自立した女性の通う知的な大学」というイメージが、自分のなかで現実のものとなって膨らんでいくのを感じていた。志望校に定めて3年後、中国文学中国語学科(当時)に入学。「天安門事件に衝撃を受け、日本にとって中国の影響は益々大きくなるだろう」と直感し、専攻を決めた。同時に、好きだった国文学への興味も強く、万葉集や和歌の授業に出ては古典に親しんだ。坂本さんが就職した1994年は「バブル」崩壊の直後で、「就職氷河期」がその年の流行語となったほど新卒者には厳しい年だった。先輩の活躍ぶりを目の当たりにし、男性と同じように働ける大手企業の総合職を目指していた坂本さんは、「お茶大で最高にまじめに就活をしたひとり」と苦笑しながら語るほど、資料請求のがきを山ほど書き、OGを訪問し、学外の仲間からの情報収集にも励んだ。その甲斐あって、第一志望で難関の金融機関に入社が決まった時は、まさに順風満帆のキャリアのスタートを切ったかのような思いだった。

人生、寄り道をしても無駄なことはひとつもない

しかし、配属された職場での現実には期待に反して厳しく、2年経たずして転職という選択をする。「いまと違い、皆辞めないですし、挫折感でいっぱいでした」。そんな時、勧められてベネッセという企業に出会う。「『よ

く生きる』という企業理念に共感し、数字を中心とした業務とは全く違う、教育、子育て、介護という事業に温かみを感じて振り子がふれた」と、坂本さんは16年前を振りかえる。ベネッセ入社後の坂本さんは、4つの部署を異動しながら管理職に昇進し、キャリアを一步一步積み上げてきた。入社直後は中学生の国語の教材作りを担当。そこでは思いもかけず、大学での国文学の学びが大いに役立った。6年後、自ら手を挙げて財務・IR室への異動を願い出る。「当時、業績が悪化するなかで、会社全体のことをもっと知りたくなり、業績を外部に説明するIR担当を希望しました」。ここでも前職の金融機関での経験がいきで、思いが叶う。この異動こそが、坂本さんのその後のキャリアを大きく変えるきっかけとなる。約1年で、隣にあった「経営企画部」に移る。男性6人の中に女性が1人。社長直轄の部署だけあってMBA保持者も多かった。触発された坂本さんは仕事の傍らグロービスに通い、経営を一から学んだ。

人に導かれるキャリアもある

現在、坂本さんは広報部の課長として、ベネッセの企業イメージの向上と企業価値の最適化を図るため、多岐にわたる業務を率いている。そのひとつが「トップ広報」で、経営企画部時代から坂本さんが担当している。経営企画部が発展解消し、その仕事を持つて広報部への異動を勧められた時、事業部門へ戻ろうと思っていた坂本さんは、正直悩んだ。信頼する先輩から「自分で作るキャリアもあるし、人に導かれるキャリアもある」とアド

バイスを受けた。素直に従って7年後のいまの自分があると感謝している。「新しい仕事や取組みに声をかけてもらった時は怖がらずに引き受け、積極的にチャンスを掴んでいくことを心がけています」と言う坂本さんは、真の意味で「オープン」な人である。自分の可能性に対しオープンで限界を設けず、見えない未来に対しても臆することなく踏み出すオープンさが坂本さんのキャリアを歩む原動力になっている。これからの女性管理職としての坂本さんの夢は、「経営に関心があるので、意志決定の場に加わり、提言をしていきたい」と頼もしい。個人的には、若い人に、コミュニケーションについて自身の経験を伝え分かちあいたいという。

文責：坪田秀子(学長特命補佐)

わたしのオフタイム

昨年ワインエキスパートの資格をとった。元々食べたり飲んだりすることが大好き。ワインのことを勉強し始めたら、品種や年代、地理や歴史の知識など奥が深く、今でも2週間に一度はワインスクールに通う。ワインを通じた多様な人たちとの出会いも豊かな収穫。今、ハマっているのは北西イタリア、ピエモンテ州のワイン。

附属学校園からのお知らせ

附属小学校便り

—— 教育目標『自主協同』のもとで ——

附属小学校の教育の特色について、昭和初期から20年以上主事を務めた堀七蔵先生は、『小学校における教育計画』という監修著書の中で、次のように述べています。

「第一に、学校内外の社会生活の経験に基づき、人間相互の関係について、正しい理解と協同、自主および自律の精神を養うことを考慮しなければならない。」

これが、現在の附属小学校の教育目標の『自主協同』となつて、脈々と受け継がれて来ています。

この『自主協同』という教育目標のもと、教師の願いと子どもたちの思いを練り合わせて、ともに創る学校行事の伝統を大切にしています。今回はお茶らしい学校行事

や子どもたちの生活の一端を紹介します。大きな行事には、運動会（5月）、林間学校（8月）、大学講堂で行われる音楽会（11月）などがあります。



「自主協同」の碑（いしづみ）

また、学校の特色として子どもたちの通学範囲が東京都23区内と広いため、安全指導に力を入れています。同じ方向の通学経路の者で通学班を作って顔なじみになり、友達関係を広げています。非常時を想定して引き取り訓練や通学班別一斉下校も実施しています。ふだんから安全指導や仲間の繋がりを深める工夫をしています。

—— 運 動 会 ——



1年生の「玉入れ」

毎年5月のある土曜日、附属小学校の芝生の校庭から、にぎやかな子どもたちの歓声が響くのを耳にする方も多いことでしょう。約700人の子どもたちが赤、黄、緑の3色に分かれて元気いっぱい、競技や演技

を楽しんでいます。昔は紅白対抗や学級対抗もありましたが、近年では異年齢の縦割り班活動の一環として、学級や学年の枠を越えた仲間との結びつきを大事にしています。入学したときに入る自分の縦割り班は、卒業まで変わりません。高学年が低学年の子の性格をよくわかった上で優しくいろいろ教えている姿は微笑ましいものです。あこがれの6年生に向かって声をからして応援する小さな姿にはエネルギーが満ちあふれています。運動会は子どもたちが大きくたくましく成長する格好の機会です。

また、運動会には保護者の協力も欠かせません。前もって各家庭に入校証を配り、当日は安全パトロールをしてくださっています。このような保護者（PTAかがみ会）のサポートもあり、大きな行事が安心して安全に行われています。



全校種目「大玉送り」



6年生の林間学校での林業体験

—— 林 間 学 校 ——

8月下旬、4年生が1泊2日、5・6年生が2泊3日で林間学校に出かけました。今年度は、4年生神奈川県足柄方面、5年生群馬県鹿沼高原、6年生長野県白樺湖方面です。それぞれ自然の中で体験を通して仲間との

絆を深めました。酪農や林業体験、そして「郷土料理を作って食べる」活動の中での地元の方々とのふれあいも心に残る思い出です。約130人の集団生活では、自分のことだけでなく人のために働くこと、きまりを守ることの重要性、他の人への感謝な

安全を最優先に

～通学班別会や安全教室～



1年生の交通安全教室

登下校のマナーや安全について考える子を育てるために、今年度は全校児童を24班に分けて各担当の教員と話し合ったり集団下校をしたりしています。1年生の保護者は、最初の通学班別会に参加して、同じ方面から通学するお姉さんお兄さんの顔を覚えて安心するようです。子ども一人ひとり連絡先など詳しく書いた「通学班カード」で、学校と家庭の連絡をしっかりとって、緊急時に対応できるよう備えています。

また、大塚警察署の協力を得て、「交通安全教室」や「防犯教室」を開いたり、不審者対応訓練を実施したりして、全校児童の安全を最優先に、学校生活を送っています。



6年生の林間学校での「ほうとう作り」

ど教室の学習では得がたい宝物を得て、無事帰ってきました。生まれて初めての林業体験で、切り倒した(身長と同じ位の)ヒノキを「(生きているんだから)どうしても持って帰りたい」と抱えて帰ってきた6年生の子もいました。

【いずみナーサリー】

7月

- プールあそび
- ナーサリー室内解放日
- 大学との研究会
- 避難訓練
- Ochasとの夏野菜カレーパーティ

8月

- Ochasとのスイカパーティ

9月

- 引き取り訓練
- 学生サークル“たんぼぼ”
「空気鉄砲で遊ぼう」
- 大学との研究会

【附属幼稚園】

7月

- 5歳児熱帯植物園見学
- 誕生会・七夕
- いきもの博物館
- 5歳児ハーブを楽しもう
- 1学期終業式
- 夏季休業日始め

9月

- 2学期始業式
- クラス懇親会
- 誕生会
- 避難訓練
- 4歳児遠足
- JICA中西部アフリカ研修生来園

【附属小学校】

7月

- 歌舞伎鑑賞(6年生)
- 学校参観(台湾より給食交流)
- 委員会活動(5・6年生)
- 校庭の芝生の補植活動
- 防犯教室
- 1学期終業式

8月

- 林間学校(4・5・6年生)

9月

- 2学期始業式
- 委員会活動(5・6年生)
- 水遊び・水泳終了
- 開校134周年記念日
- 緊急メール引き取り訓練
- 栄養教諭教育実習開始

【附属中学校】

7月

- 全学年保護者会
- ハザー
- 林間学校・志賀高原
- 夏休み開始

8月

- 夏休み終了
- 3年生学力テスト
- 教育実習II期開始

9月

- 2年生郊外園(大根の種まき等)
- 自主研究講堂発表会
- 生徒祭
- 保護者参観日
- 音楽行事

【附属高校】

7月

- 2年生農場実習(ジャガイモ収穫)
- 1・2年生学力テスト
- 附属校園PTA連絡委員会主催
小柴昌俊先生講演会
- 日中高校生交流・学校交流
- 全学年保護者会
- 日中高校生交流・記念植樹
- 1学期終業式
- クラブ合宿

8月

- クラブ合宿
- 東工大サマーチャレンジ
- 合唱部全国高等学校総合文化祭
(富山)出場

9月

- 2学期始業式
- 1年生農場実習
- 3年生学力テスト
- II期教育実習
- 文化祭
- 学校説明会

キャンパス点描

オープンキャンパス2012を開催しました ……………



7月14日(土)～16日(月)の3日間、学部オープンキャンパスを開催しました。連日の猛暑の中、6,000名を超える受験生や保護者の方々にご参加いただきました。

全体説明会では、羽入佐和子学長から躍進するお茶大の紹介と受験生へのメッセージ、続いて耳塚寛明教育機構長から多様な入試制度、お茶大の特徴的な教育プログラムである「複数プログラム選

択履修制度」や「文理融合リベラルアーツ教育」、本学独自の奨学金、学生寮等についての説明がありました。その後、学部長による学部・学科の説明があり、皆さん熱心に耳を傾けていました。

全体説明会後には、各学科・講座・コース別に、模擬授業や在学生による相談、研究室ツアーなど工夫を凝らしたプログラムが用意され、ピンクのTシャツを着た学生が大活躍。どのプログラムも大盛況で、参加者から活発な質問が飛び交っていました。

来年も引き続きオープンキャンパスを実施いたします。開催時期が決まりましたら、大学ホームページでお知らせいたします。



岩手県教育委員会及び宮城県気仙沼市教育委員会などと …………… 相互協力に関する協定を締結しました

お茶の水女子大学は、岩手県教育委員会など東日本大震災で被災した8つの県や市町村の教育委員会と、震災復興に向けた多様な取組に関して相互に協力し合い、児童生徒の育成や地域社会の復興・発展に寄与することを目的として、7月18日(水)に包括的連携協定を締結しました。

連携協定を締結した教育委員会

岩手県教育委員会及び岩手県内(野田村、宮古市、山田町、大槌町、釜石市、大船渡市)の各教育委員会及び宮城県気仙沼市の各教育委員会とも連携協定を締結しました。

協定締結の経緯

お茶の水女子大学は、2011年11月に「東日本大震災被災地支援プロジェクトチーム」を立ち上げるとともに、「東日本大震災の被災地に対する支援方針」を定めました。

東日本大震災被災地支援方針

- 1.被災地のニーズに合致した効果的な支援であること。
- 2.大学が組織として行う支援であり、お茶の水女子大学の特性を生かした支援であること。

3.中長期的な展望のもと、計画的な支援を行うこと。

4.学生が参加する場合は、ボランティアな意志を尊重し、安全を図るとともに学生の成長に資する支援を行うこと。

この方針に基づき、岩手県教育委員会と共同して予め被災地のニーズを調査した上で、サイエンス&エデュケーションセンターが中心となり、津波と地震で破壊された現地の小・中学校の理科教育支援活動を展開してきました。

今後更に実質的な支援活動を活性化させていくため、この度、岩手県教育委員会と復興支援に関する包括的な連携協定を締結することになりました。

岩手県大槌町仮設中学校での理科室の様子



お茶大から送られたガスバーナーで、実験ができるようになった!

教員研修を、ネット環境で実施する方法を開発 2011年11月から開始

受講生側

スピーカーと大きなモニターで受講する受講生

iPad Face Time使用
iPadにはスピーカーと液晶プロジェクターを接続

講師側

本学卒業生黒田玲子さんが 2013年度「ロレアル-ユネスコ女性科学賞」を受賞!



日本を代表する化学者であり、お茶の水女子大学理学部化学科卒業生の黒田玲子さん(くろだ・れいこ、東京理科大学総合研究機構教授、東京大学名誉教授)が2013年度「ロレアル-ユネスコ女性科学賞」を受賞しました。

今回の受賞は、遺伝子や蛋白質など自然界に存在する“分子のキラリティー”(左右対称性)現象が重要であることを明らかにし、有機・無機化合物ばかりではなく、ア

ルツハイマー病などの幅広い応用研究にもつながる多大な貢献を成し遂げたことによるものです。

2013年で15周年を迎える同賞は、1998年にロレアルとユネスコが世界規模で女性科学者の地位向上を目指すべく創設されて以来、科学分野の発展に貢献した女性科学者72名が受賞しています。今年度は「物理科学」の分野でめざましい業績を挙げている世界の優れた女性科学者5名を発表しました。また、2008

年の米国受賞者エリザベス・ブラックバーンと、欧州受賞者アダ・ヨナットは、それぞれ2009年ノーベル医学・生理学賞およびノーベル化学賞を受賞するという快挙を遂げており、同賞は「女性のノーベル賞」ともいわれています。

2013年3月28日にパリのユネスコ本部にて開催される授賞式において、賞金100,000USドル(約800万円)が授与されます。

4ページに
関連記事

「ロレアル-ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」

本学大学院人間文化創成科学研究科博士後期課程理学専攻の工藤まゆみさんが、第7回「ロレアル-ユネスコ女性科学者 日本奨励賞」を受賞された記事を掲載しました。こちらの賞は、日本の若手女性科学者が国内の教育・研究機関で研究活動を継続できるように奨励することを目的として創設されました。

同年度に本学関係者がこれら2つの賞を受賞したことは、大変喜ばしく名誉なことであるといえます。

国際シンポジウム「日米のワーク・ライフ・バランス ～ジェンダー・格差センシティブな視点から～」を開催しました

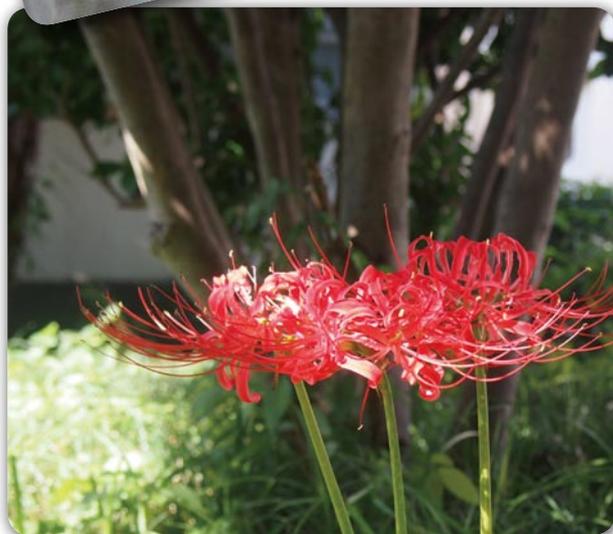
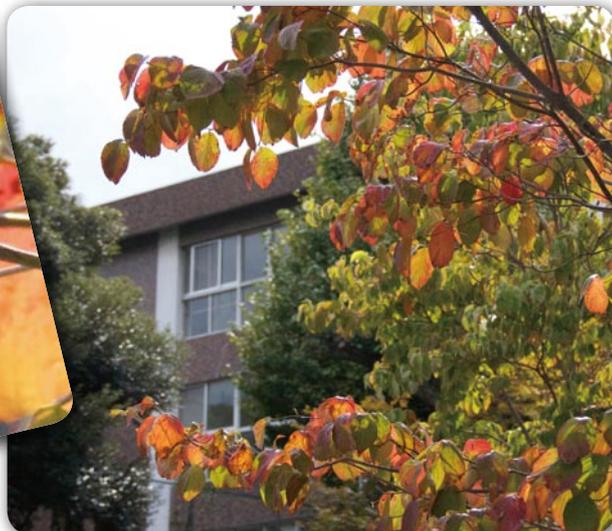
7月1日(日)・2日(月)の2日にわたり、「ワーク・ライフ・バランス」をテーマとした国際シンポジウムを開催しました。このシンポジウムは文部科学省・日本学術振興会委託事業『ジェンダー・格差センシティブな働き方と生活の調査』(研究代表者:永瀬伸子)がワーク・ライフ・バランス実現可能な社会を目指すために行った、日米の子育て世代の男女に対する独自調査の結果の発信と、米国からお招きした講師とともに日・米両国が抱える問題(女性の就労継続が困難なこと、広がる所得格差、男性の家事・育児参加がしにくい就労環境と家族的責任差別など)についてディスカッションを行いました。両日とも企業の人事担当者など大勢の社会人の方々にご参加

いただき、働きやすい制度について、ともに考えました。

シンポジウム・日米調査結果の概要はプロジェクトホームページにてご覧いただけます(「WORKFAM」で検索または、<http://www.dc.ocha.ac.jp/gender/workfam/index.html>)。



キャンパス点描



キャンパス風景
提供:お茶の水女子大学写真部

お茶の水女子大学学报 第234号

▽発行日:2012年11月10日

▽発行:国立大学法人お茶の水女子大学

東京都文京区大塚2-1-1(〒112-8610)

ご意見・ご感想はこちらまで

学術・情報機構広報チーム

電話 03-5978-5105

FAX 03-5978-5545

E-mail: info@cc.ocha.ac.jp

URL : http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学报「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。